

Title	開発と女性：ジェンダーに関するプロジェクト評価の再検討： 「西洋フェミニズム」と「経済開発」の視点の下で
Sub Title	
Author	高沼, 理恵(Takanuma, Rie) Thiesmeyer, Lynn J.
Publisher	慶應義塾大学湘南藤沢学会
Publication year	2003 - 04
Jtitle	研究プロジェクト優秀論文
JaLC DOI	
Abstract	本書は、発展途上国における女性収入生成プロジェクトについての概念的な問題を取り扱う論文である。「男女間の測定」という行為において(女性が)「男性に対して従属的な地位にいる」という概念をどのように測定し評価するのか、そういった概念がGDIやGEMという測定の指数とどう関係しているのか、「男女の不平等」とは経済に還元出来るもののみの測定になっているのではないかという点など挙げている。
Notes	テイスマイヤ, リン研究プロジェクト2002年秋学期
Genre	Technical Report
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0424">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=0302-0000-0424</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.



開

# 発と女性—ジェンダーに関する プロジェクト評価の再検討

—「西洋フェミニズム」と「経済開発」の  
視点の下で—

2002年 秋学期  
AUTUMN

---

高沼 理恵 総合政策学部 3年

ティースマイヤ,リン 研究プロジェクト

---

慶應義塾大学湘南藤沢学会







## 「研究プロジェクト」優秀論文推薦のことば

最近、国際連合ならびに日本の外務省において検討されるようになってきた、発展途上国における女性収入生成プロジェクトについての概念的な問題を取り扱う論文である。

開発プロジェクトにおいて十分に考慮されるべきジェンダー分野の評価方法に触れる考察論文であるので、推薦したいと思う。

慶應義塾大学  
環境情報学部助教授  
ティースマイヤ, リン



2002 年度秋学期 ティースマイヤ研究会 2 研究論文

開発と女性—ジェンダーに関するプロジェクト評価の再検討  
—「西洋フェミニズム」と「経済開発」の視点の下で—

慶應義塾大学総合政策学部 3 年

70005487

高沼 理恵

s00549rt@sfc.keio.ac.jp

## はじめにー問題提起

「開発と女性 (WID)」という用語は、1970 年代初頭、国際開発学会の部会の一つであるワシントン DC 女性委員会 (The Women's Committee of the Washington, DC, Chapter of the Society for International Development) によって作られ、アメリカ国際開発庁 (USAID) で WID アプローチとして採用された。WID とは、社会・経済開発が男性と女性に異なった影響を及ぼしている事実に着目することから始まり、その原因を明らかにし、開発過程から生じる成果が男女に公平に及ぶために開発はどのようにあらねばならないかを問うものである。

初期において、女性は経済開発に貢献できるにも関わらずこれまで等閑にされてきた有益な資源の一つであるという認識から、その原因を「女性が開発過程から排除されている」点に求め、女性を開発過程に統合することに主眼を置いた。やがて女性という一側面のみ焦点を当てることの限界が指摘され、男性と女性の社会的関係 (gender) に主眼を置き、女性が「エンパワーメント」を通じてそれを改善していくことで男女が公平に開発の成果を享受できるとする「ジェンダーと開発 (GAD)」という概念が提起された。それは、WID のように女性のみ焦点を当てたのでは、男性に対して従属的な地位にいるという女性本来の問題解決には至らないという立場を取り、その根本的な目標を「女性の解放」におき、従属と不平等の問題が重要課題であるという前提の下に女性が力をつけることにより、男性と対等で、公正な社会を作り上げていくことを目的としている。<sup>1</sup>

しかし、ここにはいくつかの概念的な曖昧さが存在するのではないか。第一に、GAD アプローチの目指す「女性の解放」とはいかなるものであるかという曖昧さである。第二に、「男性と対等」で「公正」な社会とはいかなるものであるかという曖昧さである。そして第三に、「女性が力をつける」「エンパワーメント」とはいかなる状態であるかという曖昧さである。これらの概念的な曖昧さは、その曖昧さ故に開発政策において自明視され、現実との齟齬をきたしているのではなかろうか。

こうした概念的なものが指し示すものと現実との間の何かしらの格差は、私自身がタイの山岳民族の村を訪ねたときに感じたものである。以前、タイ北部チェンマイ市の山岳民族支援 NGO が、山岳少数民族であるモン族の女性への識字教育を行っている現場を視察したことがある。確かに村中男性はおらず、明確な性別役割分業が見て取れた。女性はタイ語教育を受けられなかった方々であり、それは男女の教育格差の結果である。実際、タイ語がわからなければ、チェンマイ市で日用品の買い物はおろか、バスにすら乗れないのだ。女性はエンパワーメントせねばならないといわれるのも頷ける。

しかし、視点を変えれば、まだ小さな子供や乳飲み子が沢山いることが分かる。粉ミルクのないこの村で、母親がいなければ乳飲み子は何を食すればいいのだろうか。こうして

---

<sup>1</sup> モーザ(1996)p22

賃金労働に出ることなく村に残る女性は、エンパワーメントされていないのだろうか。そもそも、このエンパワーメントとは一体「何を指している」のであろうか。先進国の女性が家に残る専業主婦であっても、彼女らはエンパワーメントされねばならないとは決して言われないのである。実は私は、とても暴力的な視点で彼女達を見つめ、語ろうとしていたのではないか。この体験が、先の概念的な曖昧さへとつながっていった。

本論文では、以上の概念的な曖昧さを、現実において見られる「男女間の測定」という行為に沿って問い直す。「測定」こそが、こうした概念的な曖昧さをそのまま引継ぎ、現実には当てはめている道具だからである。具体的な問題提起として、「男女間の測定」という行為において、「男性に対して従属的な地位にいる」という概念を、どのように測定し、評価しているのだろうかという点、GDI (Gender Development Index) や GEM (Gender Empowerment Measure)<sup>2</sup>という測定の指数が作成されたが、それは「男性に対して従属的な地位にいる」という概念とどう関係しているのかという点、最後に「男女の不平等」とは、経済に還元できるものみの測定になっているのではないだろうかという点を挙げる。私は、以上の問題点を、「西洋フェミニズム (Western Feminism<sup>3</sup>)」と「経済開発」の交差する視点として、タイで行われた所得創出プロジェクトにおける日本とタイの研究者の評価から、男女間格差における「測定」の現実を検討したい。

## 1. 「西洋フェミニズム」と「第三世界の女性」

### 1-1. 「西洋フェミニズム」とは何か

もともとフェミニズムは、男女間の社会関係、法的地位、教育へのアクセスなどの中で一貫して女性は男性より劣る存在として従属させられてきた、という問題認識から生まれたものである。こうした社会関係は決して生物的に所与のものではなく、むしろ生物学的な性差 (sex) ですら社会的に構築された性差 (gender) によって規定されている。<sup>4</sup>フェミニズムは、こうした男女関係を覆し、男女間の平等を達成すべきであるとする。

勿論、フェミニズムが第三世界にもある思想あるいは実践であることは言うまでもないし、それ自体決して一つの思想ではない。ここでいう「西洋フェミニズム」とは、その思想的背景を近代の西洋に持つが故に、第三世界フェミニズムや第三世界女性に対して無意識的 (あるいは意識的) に、近代の西洋の思想的前提を持ち込むものである。

---

<sup>2</sup> 計算方法の詳細は人間開発報告書 2001 p264-267 を参照。

<sup>3</sup> Mohanty(1991)p52 以下の「西洋フェミニズム」も同様。

<sup>4</sup> デルフィは「第一に、セックスがジェンダーを規定するどころか、ジェンダーがセックスに先行すること、第二に、ジェンダーとは、男もしくは女というそれぞれの項なのではなく、男/女に人間の集団を分割するその分割線、差異化そのものだということ、第三にジェンダー関係が‘階層的’、つまり‘権力的な非対称性’を持つこと」を明らかにした。上野(1995)p12。



## 1-2. 「帝国主義化」する「西洋フェミニズム」

1975年の「国際婦人年」を契機に、「グローバル・フェミニズム」と呼ばれる、「女性は共通した抑圧を普遍的に体験している」ことを前提とした議論<sup>5</sup>が登場するが、それは第三世界の女性の抵抗を描くことなく、ただ「犠牲者」としてのみ捉えており、第三世界フェミニストたちから様々な批判を受けた。

Mohantyはその状況を、第三世界の女性への視線において西洋フェミニズムは帝国主義と融合するものと捉え、西欧フェミニズムの視点で第三世界女性を表象する際に3つの分析上の仮定<sup>6</sup>があるとする。第一に、女性は階級、民族、人種的背景に関わりなく同一の利害や欲望をもつ、すでに一つに確立された集団という仮定である。これは「女性共通の抑圧」という発想につながる。第二に、方法論的レベルにおいて、無批判に文化横断的な正当性や普遍性の「根拠」があるというもので、方法論における普遍主義がそれである。<sup>7</sup>そして第三に、以上二つの前提を成立させる、現実の権力関係の無視である。この権力関係とは、現存する経済的、政治的、軍事的な権力という意味以上に、第一世界の女性の中にある「第三世界の女性」の捉え方というフーコー的権力概念が当てはまる。つまり、「女性であること（ジェンダー視点的抑圧）と、第三世界という中での存在（無知、貧困、教育されていない、伝統に縛り付けられている、餓えならされた、家庭志向、虐待されている等）」という二つが彼女たちを不完全な生活に追いやっている」という仮定である。こうした仮定は、第一世界の女性が持つ、彼女らと対比した自らの「教育されていて、近代的で、セクシャリティーや体を自分でコントロールでき、自由な意志決定ができる」などのイメージの対置によって行われている。

以上の3つの前提は、現実の権力関係、あるいは表象における権力関係の無視を前提とし、普遍的方法で「女性共通の抑圧」を取り除くことができるという分析枠組を固定する。

しかし、第三世界の女性であっても高い教育を受けている女性はたくさん存在する。ましてや地域、階級などによっても女性は一枚岩ではない。例えば、インドのSEWAは、西洋のフェミニズムの想定する普遍的方法で自らの組織の存在を大きくしたわけではない。

## 2. 「測定」の含む「経済成長」という前提

### 2-1. GDIとGEM

1990年に国連開発計画（UNDP）が提唱した人間開発という概念から、ジェンダー格差

---

<sup>5</sup> 例えば、ロビン・モーガンは「女性」としての「グローバルな団結」を訴えた。

Morgan, Robin (1984)

<sup>6</sup> Mohanty (1991) p55-56、なお、訳は筆者によるものである。

<sup>7</sup> 例えば、ヘーゼル・カービーは「多くのフェミニストの著作が、女性の解放の可能性は西洋方式の工業的資本主義とその結果としての女性の賃労働への参加を通してのみ増加するという想定に侵されている」という。

Carby, Hazel (1994) p222

に関して測定基準が作成されるに至った。それが GDI と GEM である。

GDI は HDI (Human Development Index) 同様基本的能力の達成度を測定するもので、特に女性と男性の間に見られる達成度の不平等に注目したものである。HDI と同様、平均寿命、教育水準、国民所得を用い、これらにおける男女間格差（平均余命、初等・中等・高等教育の総就学率、勤労所得等の格差）を考慮して算出され、「ジェンダーの不平等を調節した HDI」と位置づけることができる。具体的には、「長寿で健康な生活」「知識」「人間らしい生活水準」という側面からなり、①出生時平均余命、②15 歳以上成人識字率、③初・中・高当教育総就学率、④推定勤労所得から算出される。

GEM は女性が積極的に経済界や政治生活に参加し、意思決定に参加できているかを測るもので、HDI、GDI が能力の拡大に焦点を当てているのに対し、GEM はそのような能力を活用し、人生のあらゆる機会を活用できるかどうかに関心を当てている。具体的には、政治参加と意志決定、経済参加と意志決定、経済資源に対する力（経済力）という側面からなり、全体に占める①女性の国会議員数、②女性の議員・高官・管理職、③女性の専門職・技術職の割合、④男性に対する女性推定勤労所得比から算出される。しかし多くの国が何らかのデータの欠陥を持っており、全ての国での比較がされているわけではない。

## 2-2. GDI と GEM に見る「経済開発」の側面

では、このような指標は、究極的には何を意味するのだろうか。これらの指標は「男女の不平等」を書き出しているのだろうか？

私はここに、経済発展が「男女の不平等」を解消するという暗黙の前提があり、従ってこれらは経済的な観測から描かれたものに過ぎないことを読み取ることができるのではないかと考える。GDI に含まれる男女比の所得概念では、平等な結果を出すためには女性の所得が可視化されねばならない。現在多くの女性はインフォーマルセクターに従事しているといわれる。<sup>8</sup>また、そのような生産活動のみならず、再生産労働やコミュニティ管理を主に担うのは女性である<sup>9</sup>といわれる。こういった労働は統計上可視化されないものであるから、女性の本当の労働は統計から消えてしまう。また、教育も保健も、極めてお金のかかるものである。こうした指標において数値上の平等を得るためには、当然男女とも可視化できる労働（フォーマルセクター）に従事し、教育や医療に可処分所得を用いることができる水準まで「所得」を上げなくてはならない。そして GEM は、当然ある程度の GDI で挙げられた指標（教育など）をクリアしたことが前提となる指数である。このように考えると、経済発展によってフォーマルセクターでの雇用も生まれ、男女の平等は達成される、という視点が暗黙の前提となっているといえるのではないかと。

勿論、私はこうした指標を全面的に否定しているわけではない。しかし、ヘーゼル・カービーも言うように、「女性の解放の可能性は西洋方式の工業的資本主義とその結果として

<sup>8</sup> 例えば、ミース M(1997)を参照。

<sup>9</sup> 前掲モーザ第 2 章を参照。

の女性の賃労働への参加を通してのみ増加するという想定に侵されている」可能性も、否定できないと考える。(西洋だけではないかもしれない) フェミニストの言う「女性の解放」が、(結局のところは経済) 開発における指標と交わる視点において、「女性のエンパワーメント」の結果、「男性に対する女性の位置が上がり、男性と同じ基準になる」以上のことを意味しなくなってしまうことも考えられよう。それはフェミニズムにとって極めて逆説的な結果となるだろう。

### 3. タイ・コンケン県プーパーマン郡ハーブティー製造販売プロジェクトから —評価の再検討—

#### 3-1. 概要

##### 3-1-1. 村の概要

対象は、タイ東北地方のコンケン県の県庁所在地コンケン市から 120km 離れた(車で 2 時間半) 県西部のプーパーマン郡の村である。プーパーマン郡農業普及事務所によると、この村は 1965 年に外部からの移住者によって新しく開かれ、現在 311 世帯が暮らしている。1989 年に行政村となり、91~2 年の土地使用権分配計画で村人に土地所有の権利が認められ、92 年に電気が引かれた。村周辺の主たる生業は農業で、米、とうもろこし、大豆を栽培している。農閑期にはタイ中部へのサトウキビ労働、バンコクへの臨時労働(日給 100~140 バーツ)に出かける男性(15~60 歳)もいる。<sup>10</sup>

##### 3-1-2. プロジェクトの概要

プロジェクトは、村の農業女性グループがベンガル・カリン、アロエ、タコノキ、ショウガ、紅花、ハイビスカス等の 9 種類のハーブティーを製造・販売するというものである。ハーブティーは農業省のロゴ付きの包装紙(グループが共同購入)に入れられる。92 年に 45 人のメンバーで設立され、93 年、農業普及事務所の生活改良普及員が計画したバンパイ郡のベンガル・カリン茶製造の視察旅行への参加をきっかけに、同プロジェクトに発展した。

村長によると、村人はプロジェクトの開始に賛同し、グループ基金への寄付や互助保険組合からの資金借り入れ支援などを行った。当初、男性たちは女性の活動に全く興味を示さず、女性たちにも参加を説得する必要があったが、ハーブティーの製造販売に成功すると女性たちの参加も増え、男性も関心を示し始めた。男性は近くで原料の採集や製品の運搬を手伝うだけで、プロジェクトの主導権をとろうとはしなかった。女性たちは委員会を作り、毎月全員で会議を開催した。

村人の 3 分の 1 にあたる 120 名がグループに参加しており、実際に活動しているのは 80

---

<sup>10</sup> 以上 3-1-1. と 3-1-2. は平成 6 年度~平成 10 年度開発と女性に関する文化横断的調査研究報告書 p7 による。



名、平均年齢は 34 歳である。規定では月 30 バーツの会費を納入すると女性なら誰でも加入できるが、実際に活動的メンバーになるには農業省のロゴ付プラスチック袋を購入する現金が必要になる。グループは 15 万バーツの融資基金を持ち、規定では 3 ヶ月間の活動資金の融資を月 3 パーセントの融資で受けられる。融資者名簿では、個人ではなく小グループが融資を受けている。

活動メンバーの日常生活は、①原材料の仕入れ（ハーブは主に他村から購入、時に採集・栽培、砂糖、燃料は購入、包装用袋はグループで農業省のロゴつきを一括購入）、②原材料の加工（ハーブを刻み、砂糖を加えて煮詰め、天日干し）、③製品の包装、④販売、となっている。活動メンバーとその家族は、ほぼフルタイムのハーブティー製造・販売に世帯単位で従事している。メンバーの小グループもできているが、事実上家族ビジネスである。販売手段（車）や手腕、原材料の買い付け能力によって違いがあるが、平均するとメンバー一人当たり月 2~3 万バーツの所得がある（プロジェクト前の 10 倍）。今後、グループが作業場を持ち、食品衛生局の検査に合格すれば製品の品質保証が得られるが、工場の建設費 700 万バーツは政府や政治家の援助に期待するほかないという。

### 3-1-3. タイ国家経済社会開発計画とのつながり

タイにおける開発と女性に関する最初の長期計画（1982-2001）は、第 5 次（1982-86）、第 6 次（1987-91）国家経済社会開発計画をもとに策定された。第 2 次女性の開発のための長期計画（1992-2011）は、人間開発と地方分権化に重点を置いた第 7 次（1992-96）と、国民の発展のために多部門的で包括的なアプローチを目的とした第 8 次（1997-2001）計画に対応するように策定されている。

タイ女性国内委員会（National Commission of Women's Affairs, NCWA、日本の総理府男女共同参画推進本部と男女共同参画審議会が合体したものに相当）<sup>11</sup>はこの最初の長期計画にのっとなって 1983 年に作られ、現在、200 以上の様々な女性団体及びその連合体となっている。

この村の農村女性グループは、農業省の指導と援助により全国の全ての農村に組織化されている農業者妻の会の支部である。中央で NCWA の調整により、公衆衛生省保健局、農業省農業改良局、及び内務省地域開発局などが協力していることになっている。公衆衛生省保健局や中小企業局などの出先機関も、登録商品としての認可、工場建設と機械導入による大量生産などを提示して傘下に入るよう勧誘している。しかし、NCWA にこのプロジェクトは把握されていない。<sup>12</sup>

---

<sup>11</sup> <http://www.inet.co.th/org/tncwa/>参照。なお、NCWA の目的（筆者作成）、組織図、国家農村開発委員会との関連による女性組織の構造については参考資料①を参照のこと。参考資料①の出典は橋本(1999)。

<sup>12</sup> ここでの記述は、橋本(1999)p137 に依拠する。

### 3-2. アンケート調査<sup>13</sup>よりジェンダーバランスを考える

#### 3-2-1. 性別役割分業に関して

まず、男女間の格差の現れとして、何かしらの性別役割分業が見られるかどうかを、家事労働遂行者、生産活動（農作業）、現金収支（賃金労働）という観点から検討する。

まず家事労働であるが、この調査における家事労働遂行者のアンケートはなぜか参加者女性のみに行われていない。他のアンケート同様男性にもアンケートをとればまた何か別のことが読み取れたかもしれない。全般的に女性が行う割合のほうが高いようだが、その遂行率は日常の買い物以外は半分以下である。また、娘も家事労働をするが、それよりも夫の遂行率のほうが全体的に高い。年齢に関係なく女性だから家事をするというような明確な性別役割分業という結論は引き出せない。

次に、生産活動に関して検討してみよう。農作業では、機械を使うものは圧倒的に男性の仕事となっていることが伺える。また、堆肥集めや運搬に関しても男性の遂行率が高いようだ。全体的に検討すると、女性よりも男性のほうが遂行率は高いように思われるが、機械作業と堆肥に関する労働が目立つくらいで、明確な性別役割分担があるという結論は引き出せない。また、非参加女性も似たような回答を示しており、プロジェクトで明らかに変わったものではないといえる。

では、賃金労働ではどうか。データとして参考資料に載せた現金収支以外のものがなかったため、論文自体から推測するしかないが、主に賃金労働を担っているのは男性、女性、娘と推測される。他人の土地での労働、都市における臨時労働の男性の率は半分以上を超える。（データを見る限り、非参加女性も相当数いるだろう。）非参加女性は、家族からの送金、他人の土地での労働、賃金労働、都市での臨時労働が圧倒的に増加する。これはプロジェクトを行っていない分の時間の使い方であろう。また、仕送りを担当するのは娘だという回答が断然多かったようだ。従って、ここでも「男性は賃金労働、女性は村に残る」というステレオタイプの顕著な性別役割分担はないように思われる。

#### 3-2-2. 世帯内意志決定に関して

この調査における世帯内意志決定は、長男と長女の就学（中学校）と結婚に関するものだった。この様子では、男性が絶対的な決定権をもっているとはいえないだろう。むしろ、本人や母親のほうが決定権を持っているといえる。

プロジェクトの参加に関しても見ておくと、参加に当たって家族内で賛否両論があったのが約90パーセントであるのに、半分近くの女性が自分で参加を決めている。女性の決定権は、そう小さいものではないだろう。

---

<sup>13</sup> この先のデータの出典は、大沢(1999)による。なお、調査の方法は参考資料②を参照。参考資料②は前掲平成6年度～平成10年度開発と女性に関する文化横断的調査研究報告書p4を参考に筆者が作成した。

### 3-2-3. プロジェクトに関する評価

プロジェクトの評価に関する村人への質問を検討してみると、やはり、具体的に所得に関する質問や、所得へのアクセスとなるスキルに関するものとなっている。現状では、評価基準はこれが限界なのかもしれないが、逆に、男女の格差はこのようにのみ認識されていた、という結果の裏返しといえるのではないか。前述の性別役割分業や、世帯内意志決定ではそれと違って明確な差が出ていないことを考えると、少なくともこの村においては、経済的資源へのアクセス、あるいは資源を得ること以外に、男女間の格差は認められないということが言えるのではないか。

勿論、この質問の中にも当然評価すべき点がある。それは、村の女性の能力を認めるようになったという回答が、かなりの率であがっていることである。もっとも、初めから何も認めていなかったのに認めるようになったか、ある程度認めていたのが更にあがったのかは定かではない。

## 4. 結論

この調査にはプロジェクト前の生活の様子データのデータがないので、このプロジェクトによって生活がどのように変わったかは不明である。従って、そう明確ではない性別役割や世帯内意志決定におけるジェンダーバランスはプロジェクトの成果といえるかもしれないが、非参加女性の農作業の意識を考慮に入れると、単純にそう結論付けることはできまい。また、インタビュー項目を考察すると、プロジェクトの結果の評価はやはり経済的なものにアクセスできるようになったかという視点で構成されている。つまり、少なくともこの村においては格差の測定は経済的な指標でしか測ることができないものだと結論付けることができる。

報告書では、プロジェクトは「女性のエンパワーメントに貢献した」という結論を引き出している。しかし、もともと男女の性別役割が明確ではなかった場所に、経済的なアクセスを重視したインタビューからそのような結論を引き出すことに全面的な賛成はできない。プーパーマンの村の女性は「何もできなかった」のだろうか。それこそ、西洋フェミニズムが陥りがちな第三世界女性のイメージである。こうした結論は、「女性は経済的に男性に依存しなくなることが女性にとってのエンパワーメントである」という結論を引き出す可能性もあるだろう。地球上に、女性が男性の賃金に依存して生きていける場所がどの程度あるだろうか。しかも、そのように生きる女性はエンパワーメントすべきだとは決して言われない。

しかし、そうは言っても経済開発的な視点に対する現実に生きている村の人々のインタビュー結果を慎重に受け止めねばなるまい。こうした経済的アクセスによる影響であっても、それが村人には良いことだと認識されているのだ。

現時点では、こうした格差の認識や測定、政策の評価が限界かもしれないし、女性の存



在が見直されているのであれば、遠い将来のジェンダーバランスを改善する第一歩になると評価できる。今後、私達は、現在自明のものとして不問にされていると思われる「男女平等」と「女性のエンパワーメント」という概念に対して、その男女間格差の「測定」をどのように定義し、現実の開発政策の事前調査、実施、評価として用いるか（あるいは用いないか）を詳細に検討していく必要があるのではないだろうか。

## 参考文献

- 伊豫谷登士翁編 (2001). 経済のグローバリゼーションとジェンダー, 明石書店.
- 上野千鶴子 (1995). 差異の政治学. 岩波講座 現代社会学11巻:ジェンダーの社会学, 岩波書店.
- 大沢真理 (1999). タイ・ネパール質問行調査結果及び解説. 平成6年度~平成10年度開発と女性に関する文化横断的調査研究報告書, 国立婦人教育会館, 1999.
- 国連開発計画 (1995). 人間開発報告書:ジェンダーと人間開発, 国際協力出版会.
- 国連開発計画 (2001). 人間開発報告書:新技術と人間開発, 国際協力出版会.
- センA (1988) 福祉の経済学:財と潜在能力 (鈴木興太郎訳), 岩波書店.
- 橋本ヒロ子 (1999). 女性の地位向上のための国内本部機構—グラスツールの女性たちのエンパワーメントに果たしている役割—. 平成6年度~平成10年度開発と女性に関する文化横断的調査研究報告書, 国立婦人教育会館, 1999.
- ミースM (1997). 国際分業と女性:進行する主婦化 (奥田暁子訳), 日本経済評論社.
- 村松安子・村松泰子編 (1995). エンパワーメントの女性学, 有斐閣.
- モーザC (1996). ジェンダー・開発・NGO:私たち自身のエンパワーメント (久保田賢一・久保田真弓訳), 新曜社.
- Mohanty,Chandra Talpade (1991) 'Under Western Eyes—Feminist Scholarship and Colonial Discourses' *Third World Women and the Politics of Feminism*, Indiana University Press.
- Morgan,Lobin(1984) *Sisterhood is Global*New York,AnchorPress
- Carby,Hazel(1994)"White Women Listen!" in Centre for Contemporary Cultural Studies ed. *The Empire Strikes Back*,London,Routledge

## 参考資料① タイ女性国内委員会 (NCWA) の目的

### 政府の政策目標 (1992.)

- ・ 全ての分野—身体的、生鮮的、知的、職業的、社会的、民族的—における女性の発展を図り、社会における質の高い資源となり質の高い生活を送ることができる
- ・ タイの経済、社会、政治、行政、環境、宗教、文化、マスコミ、及び家庭の発展における意志決定に女性の参加を進める
- ・ 女性に対する全ての差別の撤廃
- ・ 肉体的、精神的拷問、脅しから女性を守る
- ・ タイ社会が女性の参加、才能、潜在的能力を評価するように発展させる

上記の目標を達成するため、第二次女性長期計画では、以下の8つの戦略をあげる。

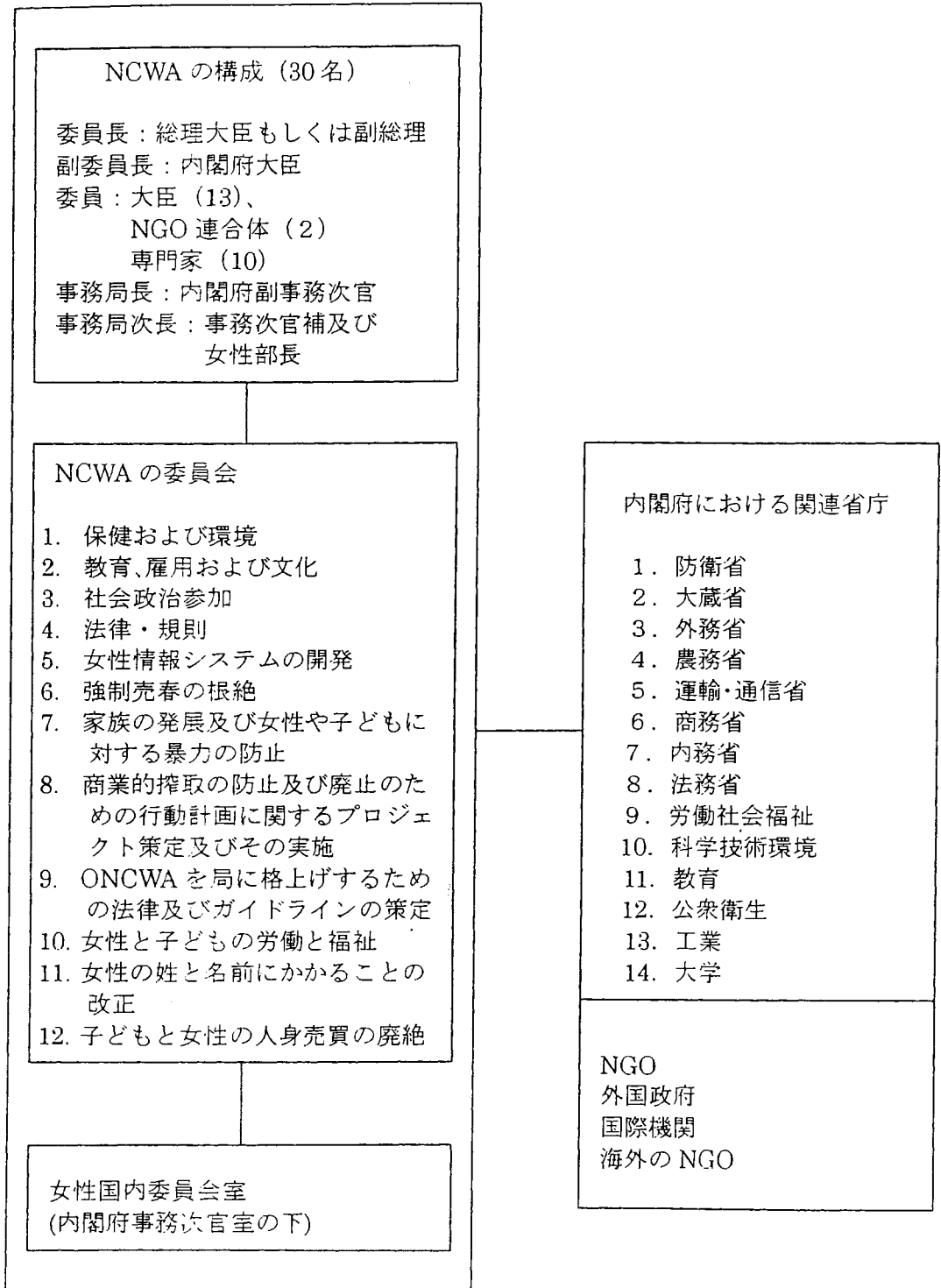
- ①女性の開発に責任を持つ中央政府組織の設立
- ②政府及び民間の開発に女性を参入させること
- ③女性の人権のために活動する組織を育成し、政府とNGOの間のネットワークの設立
- ④女性の開発計画の国家の経済社会開発計画への組み込み
- ⑤政府機関に女性の特別なニーズを理解するように奨励
- ⑥女性を対象とした特別なプロジェクトをさらに実施する
- ⑦啓発活動を推進し、全ての政党の政策に開発と女性の問題が入るようにすること
- ⑧国際的コミュニティと連携し、開発と女性の問題がはいるようにすること

※NCWAは他に「地域をベースにした幸せな家族プロジェクト」というものも行っている。  
(変化する社会的経済的環境の中で、基本的機関としての家族を強化するため、家族訓練用のハンドブックを作成し、全ての県に配布)

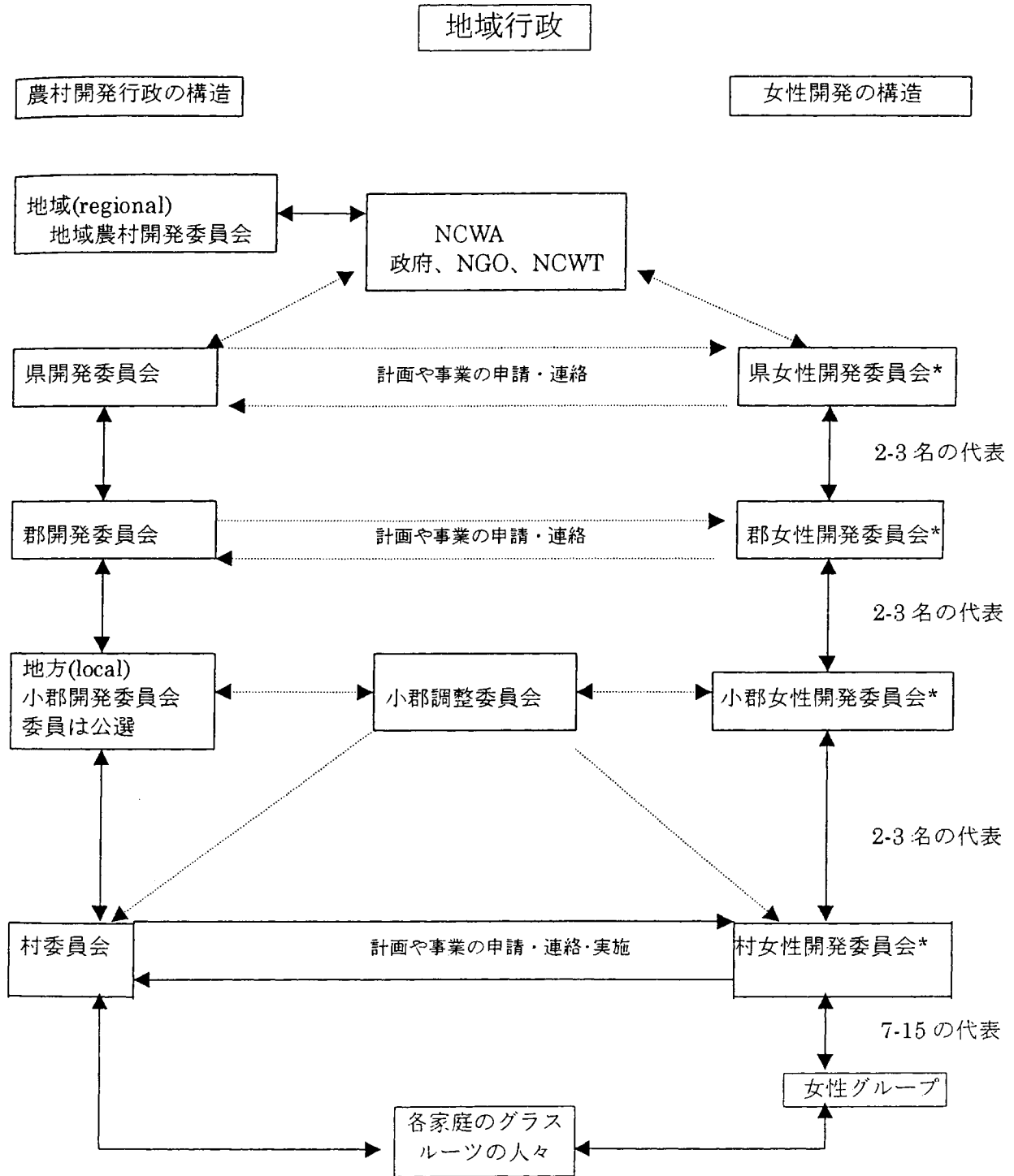
私見だが、NCWAは従来の女性の性役割をそのまま引き継いでいる可能性もあるのではないだろうか。



NCWA の組織図



国家経済社会開発理事会（NESBD）の国家農村開発委員会との関連による女性組織の構造



\*同じレベルにコミュニティ開発女性ボランティア協会が存在

\*\*National Economic and Social Development Board

## 参考資料② タイ・コンケン県プーパーマン郡ハーブティープロジェクト調査概要

### 1. 対象者

#### (1) 住民インタビュー調査質問票を用いた個人面接調査

- ①参加女性：上記のプロジェクトに参加している女性に対し悉皆調査を実施した。
- ②非参加女性：同じ地域内に居住し、プロジェクトに参加していない女性を、参加経験のあるものも含めて対象とした。
- ③男性：同じ地域内に居住し、世帯内に参加女性のいる者、いない者の両方を含めた。

#### (2) ヒアリング質問項目に基づくキー・インフォーマント面接調査

女性グループのリーダー、村長、コミュニティの役員、コミュニティ・レベルの開発連活動担当者、学校の教員等を対象とした。

### 2. 調査内容

#### (1) 個人面接調査

両国の研究分担者が担当する学生などがインタビュアーとなり、現地語により面接。インタビュアーには、事前に質問票の内容や質問方法に関するオリエンテーションの場を設け、トレーニングを行った。使用した質問票のうち、参加女性向け質問票には、プロジェクトの活動、結婚、家族・世帯、生産活動、日常的な生活・作業、現金収入、進歩・発展・開発などに関する質問項目が折り込まれている。非参加女性及び男性向け質問票には、結婚、家族・世帯に関する質問項目は省き、他は比較が可能になるよう、参加女性と共通の質問項目とした。

#### (2) キー・インフォーマント面接調査

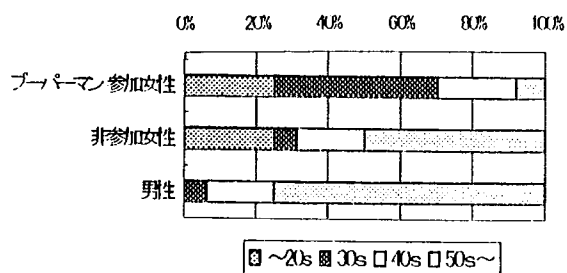
インタビュー調査の内容を補強し、追加情報を得るために、通訳（現地語⇔英語）を解したインタビューを行った。質問項目は、村の外での経験、プロジェクトへのかかわり、進歩・発展・開発（個人面接調査質問票と共通）などに関するものである。

参考資料③ アンケート回答者の属性

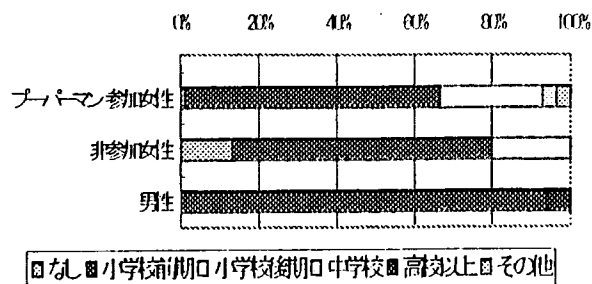
アンケート数

参加女性	非参加女性	男性	計
88	16	16	120

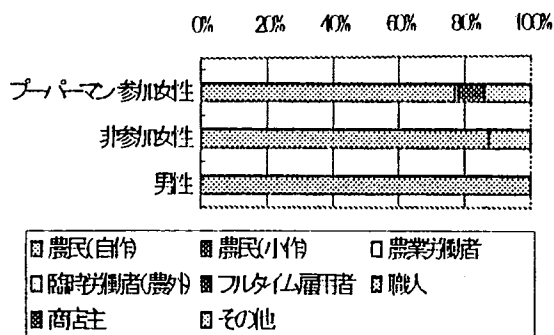
回答者の年齢構成



回答者の教育レベル構成



現在の職業



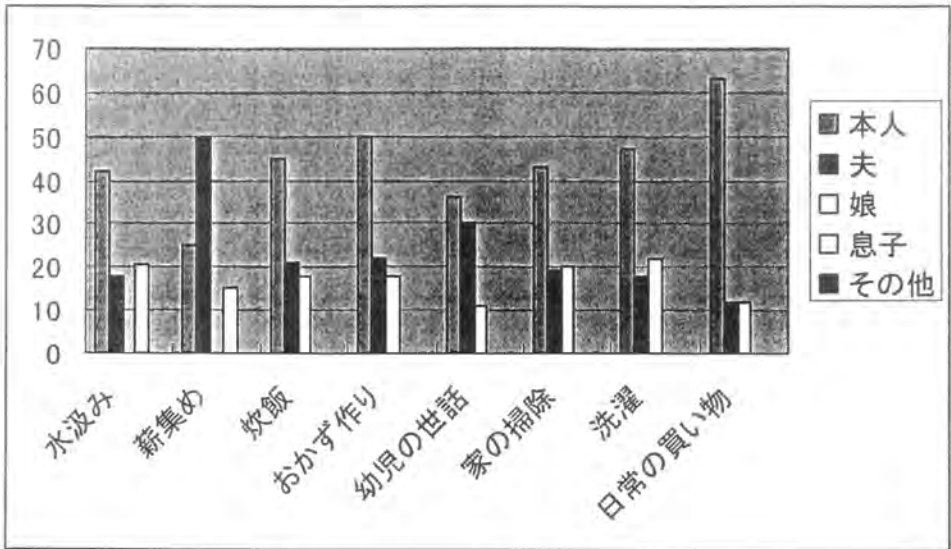
組織への加入

	プーパーマン (%)		
	参加女性	非参加女性	男性
女性組織	12.5	20.0	31.3
農業女性組織	0	15.0	93.8
農民銀行	53.6	10.0	18.8
農業協同組合	0	0	0
農業青年団	0	0	0
その他	7.7	26.3	20.0

世帯の家族員 (実数)

	タイ	
	ムアン	プーパーマン
夫	6	83
子ども	16	184
子どもの配偶者	8	6
孫	11	16
両親	3	24
きょうだい	2	24
甥・姪		1
配偶者のきょうだい		1
配偶者の親		4
配偶者の祖父母		
その他		1
非同居の家族	7	42

家事労働遂行者に関して（複数回答）※本人のみ



※水汲みは日常的な仕事ではない

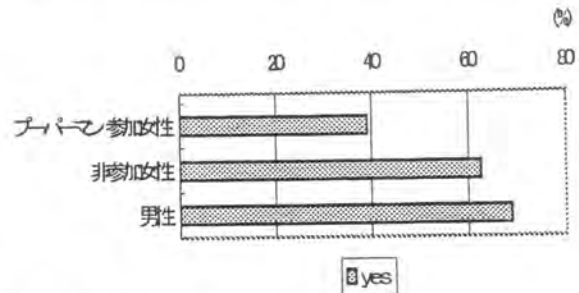
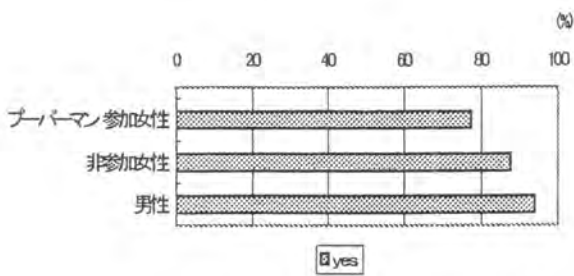
生産活動に関して

田を所有する者の割合

10~20 ライが最多

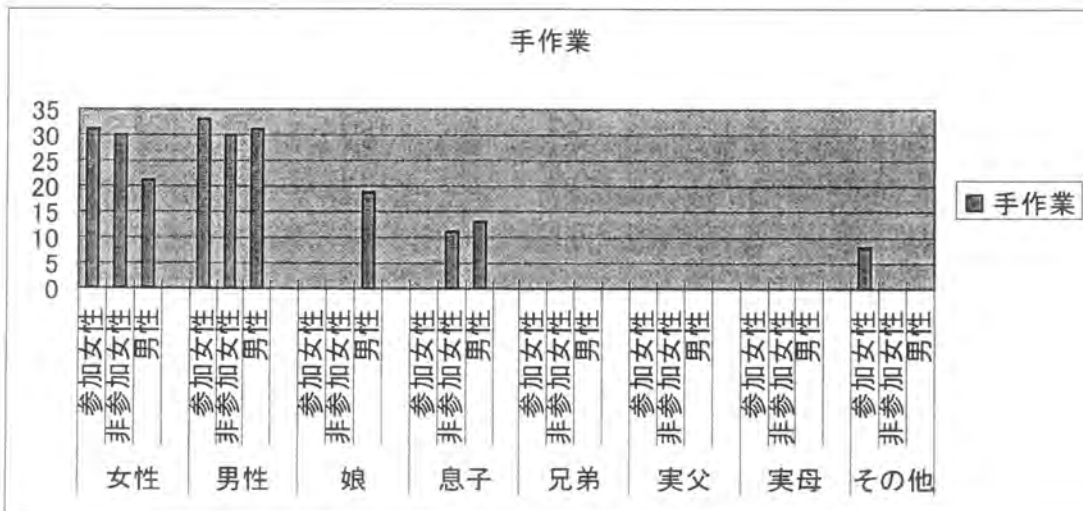
畑を所有する者の割合

10~20 ライが最多だが、分散している



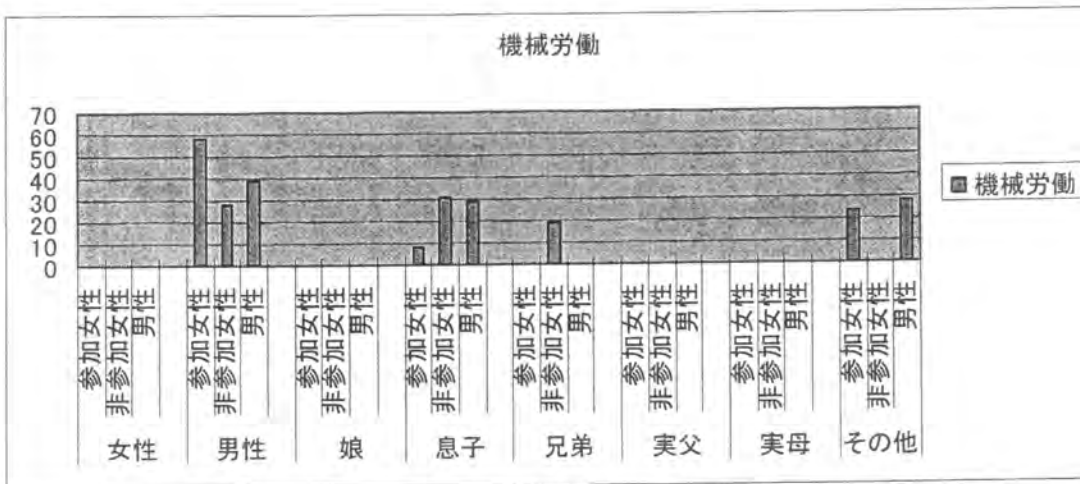
農作業の責任者と遂行者（縦文字：回答者 横文字：遂行者）

役畜や機械を用いない農作業をする者

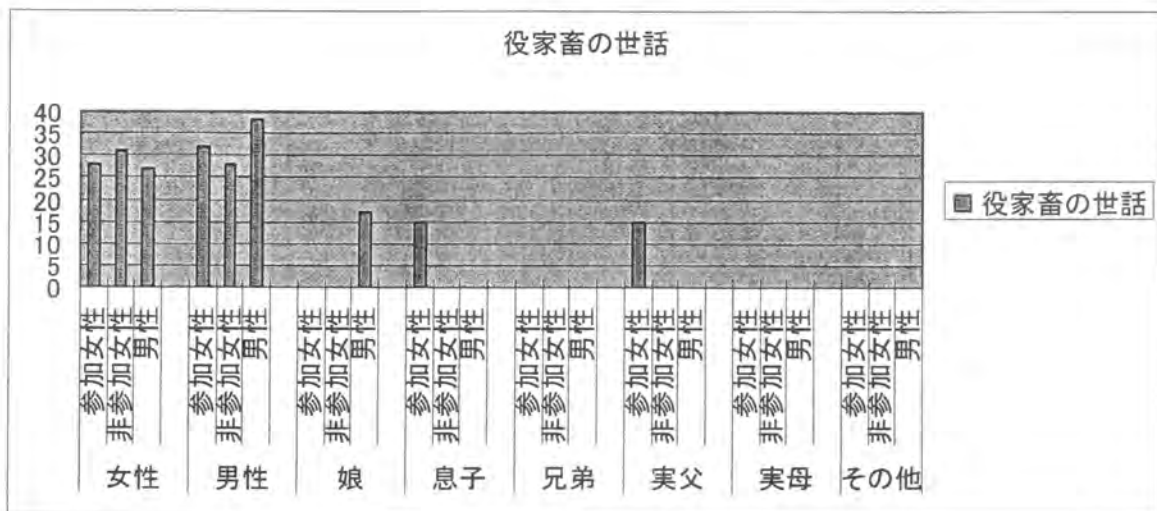




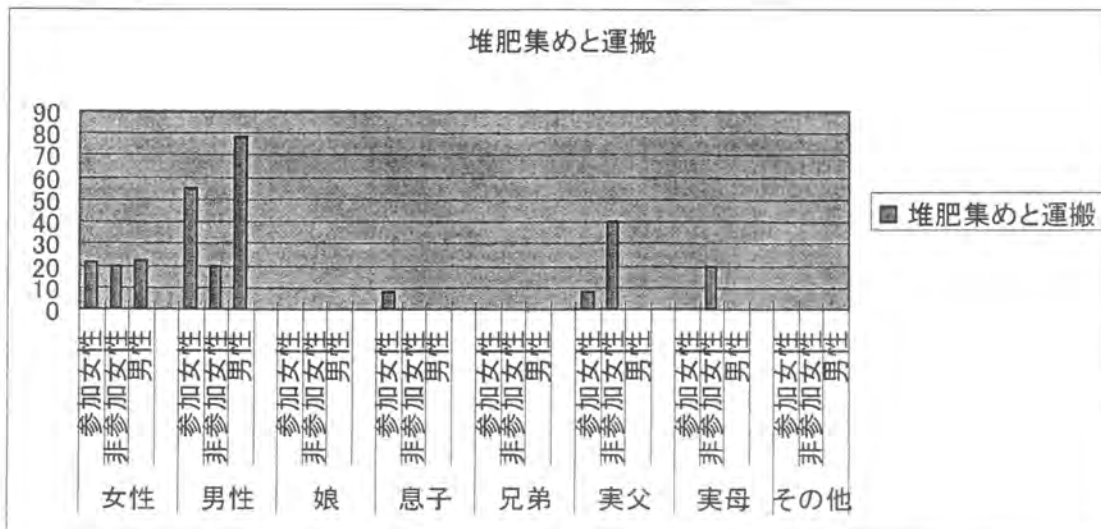
機械作業をする者



役家畜の世話



肥料集めと運搬



## 現金収支

各収入源から現金収入がある者の割合

(%)

	プーパーマン		
	参加女性	非参加女性	男性
米の販売	35.6	56.3	62.5
米以外の農産物の販売	67.0	87.5	75.0
家畜・家禽の販売	17.0	12.5	25.0
生活必需品および食料の販売	9.1	0	6.3
他人の土地での労働	34.1	75.0	50.0
賃金給料	14.9	20.0	12.5
都市での臨時労働	29.5	50.0	62.5
年金	0	0	0
家族からの送金	25.0	62.5	50.0
プロジェクト産物の販売	65.5	0	18.8
プロジェクト産物以外の産物の販売	6.8	13.3	25.0

※賃金労働は、娘や息子も相当数そんざいする。

※都市での臨時労働は、夫が最多だが、息子、指定された続柄以外の人間、娘も相当数存在する。

※家族からの送金は、参加女性の中でも小学校後期レベルの人間が「より少ない」と答えた。仕送りを主に担当するのは娘である。

※プロジェクト産物の販売で、販売を主に行う者は、参加女性全員が本人をあげ、わずかながら夫という回答があった。男性は妻をあげている。

各対象に現金支出する者の割合

各対象に現金支出する者のうち、  
大部分自給する者の割合

(%)

	プーパーマン		
	参加女性	非参加女性	男性
米	29.5	25.0	18.8
野菜	92.0	87.5	93.8
肉・魚	100.0	100.0	100.0
砂糖	98.9	93.8	93.8
塩	100.0	93.8	100.0
茶	17.0	0	6.3
燃料	63.6	31.3	31.3
衣服	98.9	73.3	100.0
子供の教育	86.4	31.3	62.5

(%)

	プーパーマン		
	参加女性	非参加女性	男性
米	34.6	50.0	66.7
野菜	27.2	42.9	66.7
肉・魚	11.5	0	18.8
砂糖	0	0	0
塩	0	0	0
茶	0	0	0
燃料	26.8	80.0	80.0
衣服	5.9	0	0

世帯内意志決定に関して

長女の就学

家族全員 > 母 2 割強 > 長女自身 2 割 > 父

長男の就学

家族全員 > 長男自身 2 割 > 母 2 割 > 父

長女の結婚相手

長女自身 8 割 > 家族全員 1 割強

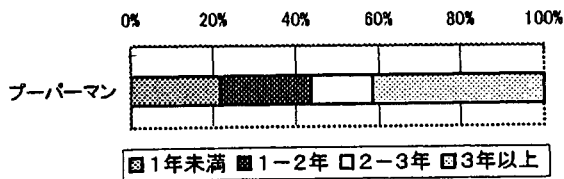
長男の結婚相手

長男自身 7 割強 > 家族全員 2 割弱

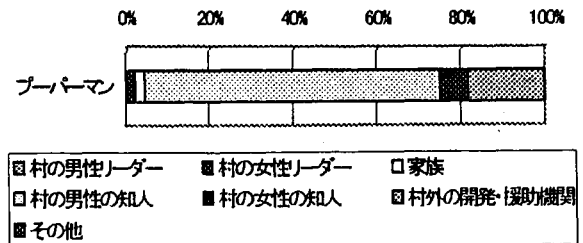
プロジェクトの参加に関して

参加を自分で決定した：49%

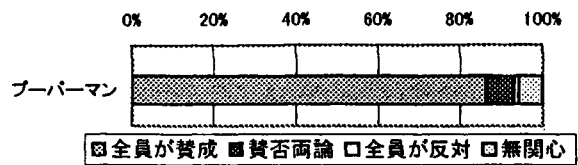
参加年数割合



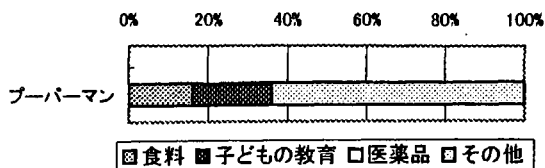
参加を薦めた人



参加に当たっての家族の意見



所得増加分に関する参加女性の意向



同男性の意向

(%)	
ブーパーマン	
食費	0
子供の教育	0
医療費	0
その他	100.0

プロジェクトに関する評価

■プロジェクトの結果として、いかに同意するか否か

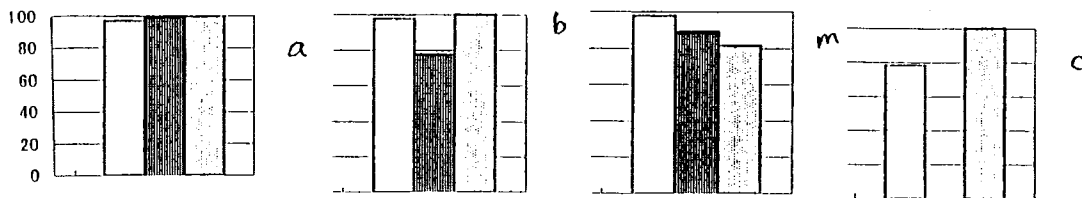
- a 世帯の所得が増えた
- b 参加女性に自分の自由になる所得ができた
- c 世帯員が日雇い労働に出かける頻度が減った（非参加女性には省略）
- d 参加女性は自分の知識や技能をプロジェクトに使うことができた
- e 参加女性は自分の新しい知識や技能を得た
- f 参加女性の読み書き計算の技能が改善された
- g 参加女性は帳簿のつけ方を習った
- h 参加女性は村の内外で知人が増えた
- i 参加女性は集会が増えた（非参加女性には省略）
- j 参加女性は前より忙しくなった
- k 参加女性は賢くなった
- l 参加女性はプロジェクトの組織管理のイニシアチブをとった
- m 女性たちがローンへのアクセスを得た
- n 参加女性に対する村人の評価と信頼が高まった
- o 女性に対する家族の評価と信頼が高まった
- p 参加女性の間で紛争をおこした
- q 村人との間に紛争をおこした

■b～mへの価値判断（n～qは非参加女性のみ）

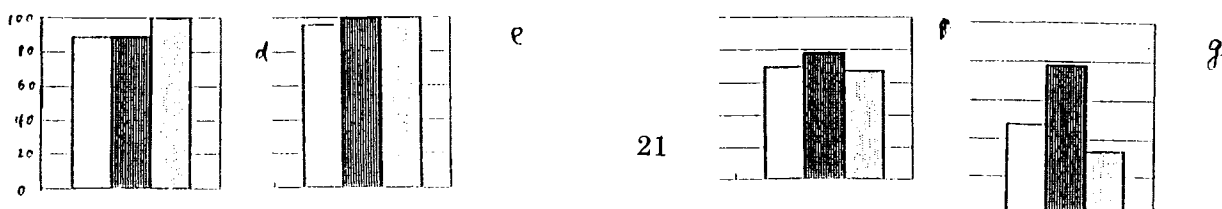
- b～m いいこと
- n,o いいこと
- p,q 悪いこと

(1)プロジェクトを通じて参加女性の金銭へのアクセスが増えたことに関する a,b,m,その結果として世帯員の日雇い労働が少なくなったというc。

□参加女性 ■非参加女性 □男性

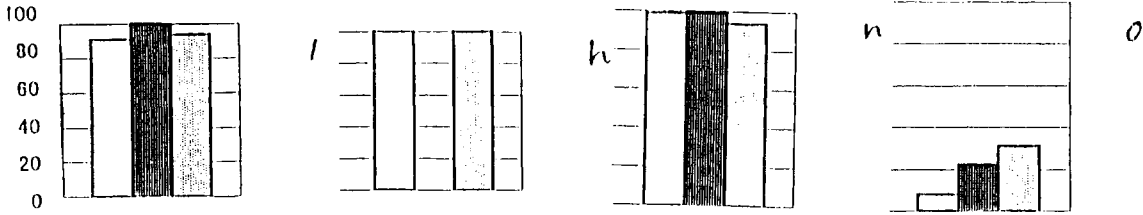


(2)参加女性の知識や技能の活用・獲得に関する d～g



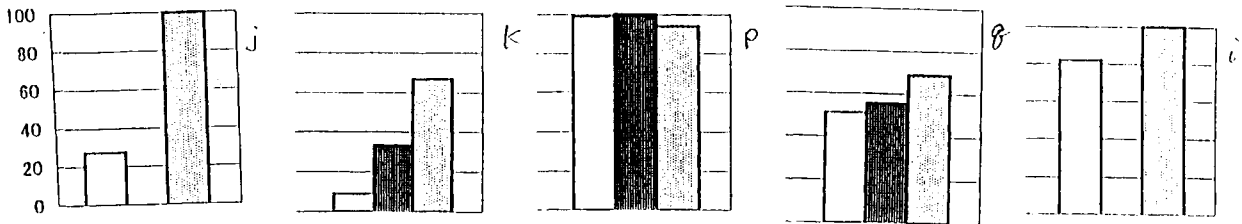
③女性たちのイニシアチブと周りの評価に関する l,h,n,o

※女性の中ではそう高くないが、30%近い男性が評価と信頼が高まったと回答



(4)プロジェクトのマイナスの影響に関する j,k,p,q,j の原因の一つとなりうる i

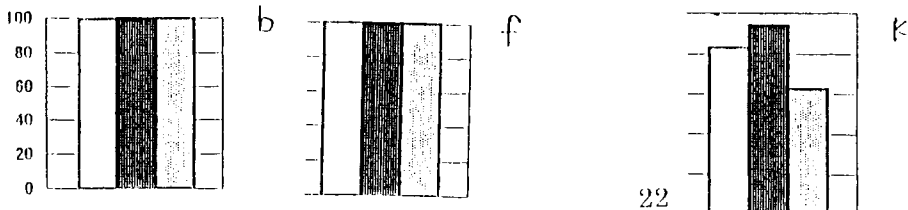
※男性全員が「忙しくなった」と回答



開発一般に関する見解

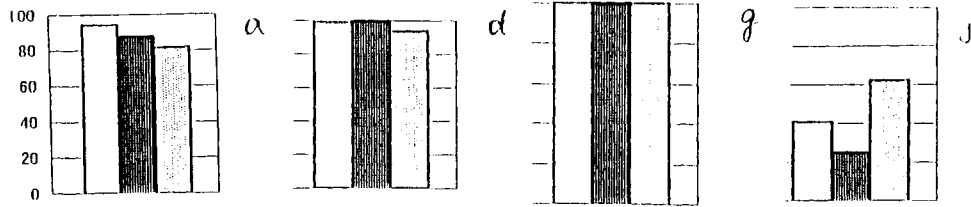
- a 所得の増加
- b テレビやラジオといった電気製品により家族の生活が便利になった
- c 村人が女性の能力を認めるようになった
- d 雇用機会が増えた
- e 徳を積むことが増えた
- f 新しいダムや道路によって地域の生活が便利になった
- g 教育機会が増えた
- h 子供たちが乱雑になった
- i 地域開発に関する村人間の紛争が増えた
- j 地域開発に関する村人間の紛争が増えた
- k 交通事故が増えた
- l 毎日の生活がより忙しくなった

(i)電気機器や地域インフラの導入・整備により、世帯・地域の生活が便利になること、及びそのマイナスのインパクトの影響といえる交通事故 b,f,k



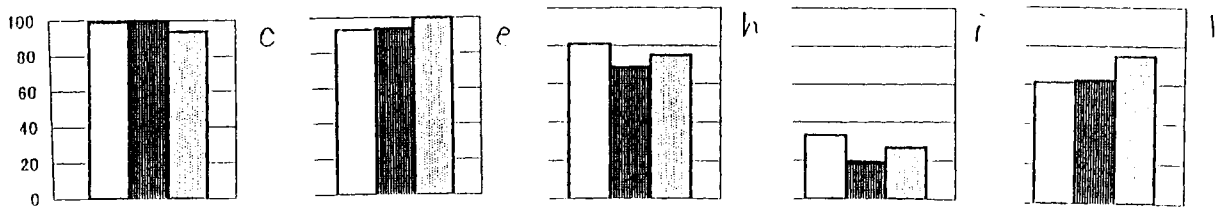


②社会経済的機会の増大に関する a,d,g,j



③文化的変化である c,e,h,i,l

※村人が女性の能力を認めるようになったという回答はいずれも高い。(男性はやや低いが…)







開発と女性—ジェンダーに関するプロジェクト評価の再検討  
—「西洋フェミニズム」と「経済開発」の視点の下で—

---

---

2003年4月30日 初版発行

著者 高沼理恵

監修 ティースマイヤ,リン

---

発行 慶應義塾大学 湘南藤沢学会  
〒252-0816 神奈川県藤沢市遠藤5322  
TEL:0466-49-3437

---

Printed in Japan 印刷・製本 ワキブプリントピア

---

SFC-SWP 2002-A-010



■ 本論文は研究会において優秀と認められ、出版されたものです。